
幼稚園百三十年記念企画 アーカイブズ『幼児の教育』(4) *****

お茶の水女子大学附属幼稚園が設立されて百三十年を迎えた。また、本誌『幼児の教育』は、同幼稚園を本拠地として一九〇一（明治三十四）年に創刊されてから百五年目となる。わが国最初の官立幼稚園の使命をにない、日本の幼児教育学の礎を開拓した東基吉、和田実、倉橋惣三をはじめとする戦前の研究者および幼稚園の「保母」（戦前は幼稚園・保育所を問わず、保育者をこう呼んだ）たちは、お茶の水の地から、この雑誌を通して、日本の幼稚園教育の理論や方法を世に問い、全国に発信したのだった。

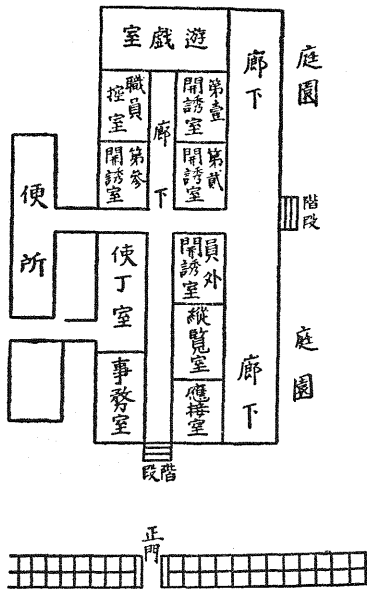
今年はそれを意識して、本誌『幼児の教育』の戦前の記事を折りにふれて「アーカイブズ」として掲載してきた。特集号の今回は、一九二七（昭和二）年第二十七卷 第三号において、幼稚園五十周年を記念して掲載された「創立当時の状況」に関する記事を転載する。（読者に読みやすいように、一部、仮名・漢字遣い等を改めた。編集部）

幼稚園創立の當時

氏 原 銀 子

今のお茶の水の幼稚園が五十年の昔創立せられた時が、我國に於ける幼稚園教育史の貴い初めのページであることは申すまでもありません。その當時の記憶が如何に重要な資料であるか、また如何に興味深いものであるかも申すまでもありません。ただ、その貴重な記憶を目のあたり辿り得る人は、今日に於て既に多くありません。茲に、氏原銀子女史に特に懇請して、こ

當時園舎の略圖



東京女子師範學校附屬幼稚園創立當時の狀況(現東京女子高等師範學校の前身)

の御執筆を煩はし得たことは非常なる幸であります。氏原女史は我國幼稚園の昔を語り得る最も古い先輩であるのみならず、我國幼稚園教育の學生のために偉大なる貢獻者として、私共の常に尊敬して居る方であります。大阪市江戸堀幼稚園長として、我國幼稚園功勞者として、諸君御熟知の膳眞親子女史の姉上に當られ、現に氏原醫學博士母堂として、お孫さん方の間に慈み多い、最も幸福なるお祖母様でいらつしやいます。吾々は、氏原女史を思ひ、膳女史を思ふ時、我國幼稚園發達史上、恐らく最も光輝ある記録の一つなるべき、此の「姉妹の功勞者」を、無限の尊敬を以て思はざるを得ないのであります。 (編者)

明治九年(月日不詳)現今の場所御茶の水に東京女子師範學校附屬幼稚園を創立せらる、當時職員撰理(校長)中村敬宇、幹事 関信三、首席保母 松野クララ(獨乙人)、保母 豊田芙雄、保母 近藤濱、助手 山

田某、助手 大塚某(の五名直接保育者)後本
田保育傳習濟横川楳子保母となる、事務員二名、
使丁女二人男一人。

園舎、洋館にて北向き、南に伸したる長方形にして、正門北にあり、順天堂醫院と向ひ合ふ。現今は敷地湯島電車通りに出て角を引き廻はされ居るも創立當時此の一角は町商家ありたり、

此の洋館の立派なるに比し外園は丸太の柵なりし、或時幼児の柵間に顔を出し往來を見て居りしに其頭丸太間に挟まり容易に抜くこと出來ず大騒したることありし。園舎の床は高く、地下室に大暖房を設け之より各室に鉄管を通し温度を送る装置なるも、其構造に不十分なる点あり其用をなさざりし。

庭は廣く西に延び、池藤棚、築山あり、又三尺四方に割せる幼児一人用の畑地あり、之れは幼児をして種子を蒔き、或は野菜草花を培養し、水を灌き草を取り、自然物發生状態の趣味を養ひ此の收穫の豆或は野菜等は自家に持ち歸らしめ、又は園内に於て煮て一同に食せしむることあり、之れが作業用として幼児用小形の鋤及び手桶柄杓を準備す。

當時保育室を開誘室と稱し、此中員外開誘室と云ふは二年八ヶ月以上満三年迄の幼児を入れ（附添人と共に）保姆保育せず、助手二名之が保育に當れり、縦覧室は園内の最も美觀を附與する處にて、床上には美しき絨毯を敷き壁間には美麗なる額面を掲げ、衣食住に関する額面は幼児の趣味深く觀られ又陳列棚あり、之れは幼児の製品、動植物の標本、諸種の玩具等を陳列し之れが觀玩によりて知識を開くに供し、又此室は來賓室用に使用せり。

此室に掲ぐる衣食住に関する額面は絹地に特に画家の描きたるものにて、版面にあらず。此の通りの額面を大阪府より依頼して製作送られたるもの、現在大阪市東區今橋愛珠幼稚園に掲載してあり、下阪の際には御一覽相成りたし。

保育用具はフレールベル氏製定の恩物を用ひ、樂器は和琴（六絃琴）とピアノ一臺あり、此のピアノは遊戯室に据へ一週二回保姆クララ氏彈じて幼児一同の唱歌に和す。此當時クララ氏の外にピアノを彈く者なし他の保姆之れを彈くことを知らざりし。

幼兒に唱歌を教ふるに手拍子を取り口移しに教へたり、當時我國に於ては未だピアノオルガンの製造出來ず、皆舶來に仰ぐ時代なりし。

唱歌保育用のもの皆無の時代にて現今の如く唱歌書の出版もなく、又音樂學校もなく、依て保姆豊田近藤兩氏作歌して宮内省式部寮雅樂弓員作人に作曲を請ひ、其作人たる芝、林、東儀、奥等の諸氏幼稚園を一週二回教授に來られ、保姆一同之れを習ひ後初めて保育用となすもの、斯様にして自ら作らざれば求むるに道なく随分苦心の時代なりし。

當時唱歌の歌詞は雅言多く其意味は幼兒に解されず、幼兒は唯其旋律の優美なるに快感を有したるもの如し、此時代の唱歌中に其意味のやや幼兒に解され、今以て使用せらるる風車水車之れなり、今左に雅言多き唱歌を示し、其二三を擧ぐ。

花 橋 さつきたつけはひもしるく我宿の花橋はほころびけり庭もかほりて。

春日影 百鳥の立ち歸り來てもろ共におのがさまさま鳴きかわす聲面白し大空の色もうららに曇りなき
日影あまねし波風の治まれる代の光りあまねし。

父 母 1 父母の我行末を朝よひに思ひはかふと嬉しくもさとし玉へるおさなかる我にはあれど。

2 いざさらばま心もちて父のみの父をいやまひ母そはの母をかしこみつかへまつらな。

露 霜 つゆしにも梢は色に出でけり衣の袖を吹く風も身にしむ虫の聲すなり驚かれけり年月はなかば
をとしも杉のむら立ち。

此の唱歌の作曲は我國古來旋律法によりキツシヨウカケテ宮商角徵羽を基礎とし作製せられ調子の名はイナツフ一越調ソフゾウツ双調ヒヨツ平調ヂヨウ黄渉調オウシキ盤渉調バンシキにして現今の、と調へ調に調と云ふが如し、之れ古來支那より伝來せるもの、此の樂理を今日使用する西洋樂理に對照するに、其原理歸着する所同一にして、東西樂理の一なる奇と云ふべし。

保育上必要な器具恩物の準備に付ては現今の如く幼稚園用の器具恩物の販賣店なく、我國創立の時代なれば一切の見本を獨逸より取り寄せ、本校御用達佐藤と云ふ者に命じ模造せしめたるも、何分初めてのこととして思ふ様に出來ず、度々其欠点を改造せしめ又色紙の如きも獨逸のものは洋紙なれば之れを我國の美濃紙又は西の内に染めさせたるに染め上り十分ならず、保姆諸氏の苦心研究指導の結果漸く適當のものを得る様になりたり、実に此時代の苦心思ふも餘りあり。又豆細工は外國のものは竹を用ひず細く削りたる木を以て大豆に接合して作るに其細木の尖端を小刀にて削り細く尖らして作らざれば出來ざる極不便のものなりしが、近藤保姆の考案により細く削りたる竹に豌豆を以て接合し容易と作り得らるる様なりたること近藤保姆に感謝する次第なり。(大豆の扁平なるに代ふるに円き豌豆を用ひ削り箸に代ふるに細き竹を用

ひたることを)

明治十一年二月始めて保育傳習生を置く、大阪府より森末、氏原銀、國直接の給費生横川楳の三名(其後
續て傳習生数名を出だせり)

明治九年より十一年の間に於て 英照皇太后陛下 昭憲皇后陛下 本校の行啓の時幼稚園へ行啓遊ばされた、此時幼稚園にては風車の遊戲を御覽に入れた、保姆一同浅黄無地甲斐絹一反を下賜せらる、後の行啓の時保姆は先きに拝受の甲斐絹を衣服に仕立着用せり。

昭憲皇后陛下 は本校へ御製を下賜せられる。(行啓の時)

磨かすば玉も鏡も何かせん學びの道もかくこそ有りけれ

右の御製に符を付け本校幼稚園共に謹唱せり。(後に於て)

當時の保姆は日本髪を結び袴を着用す。(編地)

參觀人の中外國公使も有りたるが、此中に付き一番鄭重な待遇せしは支那公使にて(名は忘却) 従者数名を連れ、(一行十餘名) 參觀後縦覽室に於て西洋料理(最上等) 饗應をなし、其室内の裝飾も立派に小鳥の籠などを提げたり、此來賓の歸りし後其料理の殘品を職員一同に與へられたるに中々殘品とは思はれぬ程の御馳走なりし。

明治十一年新緑の候、幼兒職員一同飛鳥山に遠足を催し、馬車にて行く、此時幼兒は家庭より各附添人

ありたりを以て保母は責任輕かりし。

以上は記憶思ひ出を記したるも粗漏を免れず、何分明治十二年頃の状況に付之れより以後の事情は他に就て御取調相成度候。



書き手の氏原銀子氏は、東京女子師範学校附属幼稚園設立の二年後の明治十一年に、最初の保育見習い生として配属され、日本幼稚園史に名高い松野、豊田、近藤らわが国初の保母たちと共に保育に携わった。設立当初の公的な史的事実に加えて、思わず微笑んでしまうようなエピソードも織り込まれている。

幼稚園創設には、時の文部大輔田中不二麿が重要な役割を果たし、先進諸国の幼稚園事情に啓発されながら、①幼稚園の模範を示す②教育の発展を図る③女子師範学校生徒の実習に資する、という三つの目的を掲げた(湯川嘉津美、二〇〇一)。摂理となった中村正直、語学力

堪能な関信三という逸材が幼稚園の背景を支えていた。「幼稚園」という名称は、明治五年の学制制定当時は「幼稚小学」だった。しかし、F. フレーベルが一八四〇年にドイツに設立した世界最初の幼稚園Kindergartenの名にちなみ、原語に即して「幼稚園」という名が採用されたのである。フレーベルは、知識注入型の教育モデルを批判して、子どものもつ自然の力をいつくしみ育てる新しい教育のあり方を、植物を育てる園丁になぞらえて「子どももの庭」と命名した。「保育」という言葉は、「附属幼稚園規則」(明治十年)の中において初めて使われるようになったといわれる。幼児教育に関する基本的な用語は、

附属幼稚園と共に開拓されたのである（明治八年に京都に公立の「幼稚遊嬉場」が一早く実現していたが、開設一年半で廃止された）。

保育方法や内容においても、初期の幼稚園はフレーベルの影響は大きかった。特に、この時代の幼稚園教育内容の典型ともいえる「恩物」という現代の積み木につながる教育玩具は、原理を超えて形式主義的に使用されることが多かった。そのため、後の東基吉や倉橋惣三らによって批判の対象となり、明治末以降の幼児教育理論の発展につながるという展開を招来する。初代主席保母の松野クラ女史は、ドイツでフレーベル主義の保育者養成教育を受けた人であった。氏原の記録から、当時の幼稚園では恩物だけでなく、池藤棚や畑における植物栽培に力を注いでいた様子がわかり、自然の中で子どもが育つことを重んじたフレーベルの真髄も継承されていることがわかる。



自然豊かで起伏に富んだ園庭は、現在の附属幼稚園でも同様に見られるが、場所は設立当初の「お茶の水」から、現在の大塚（同じ文京区内）に移って七十余年の星霜を経ている。旧園舎は、関東大震災で一九二三（大正十二）年に消失し、この記事が書かれた時期は仮園舎の時代である。地下室に設けられた大暖房がうまく機能しなかったという話は滑稽でもあるが、最初の官立幼稚園建築の重厚さがわかる。ごく一部の上層階級の子弟のための幼稚園であり、やんごとなき方々の行啓の頃には七十五名の園児数であった。玄関前には車回しがあったという。建物の見取り図にある付添い人の控え室や、縦覧室の存在などが、附属幼稚園の特別な性格をしのばせる（明治三十年までに主要都市を中心に園数は急増し、全国二百二十二園となった）。

昭憲皇后陛下に賜ったという「磨かずば」の歌は、現在のお茶の水女子大学の校歌である。

（編集部）